白楊ヶ丘 札幌

No.30

平成26年7月4日

白楊ヶ丘同窓会札幌支部

〒060-0061
札幌市中央区南1条西11丁目
TS札幌ビル
公認会計士・税理士 酒井純事務所内

総会にむけて

札幌支部　支部長
荒川伸夫
（第六八期・昭和四十一年卒）

同窓会員の皆様におかれましては、お元気にお過ごしのことと拝察いたします。日頃同窓会活動には一方ならぬご支援を賜り感謝申し上げます。

さて、本年度の総会は運営する担当期を決め実施することといたしました。一先ず三年は連続して実施してみようということで、私が属する六八期からのスタートになります。団塊世代三兄弟のトップバッターとして担当し、同期の絆を深めつつ同窓会発展につなげたいと思っています。後続する六九期、七〇期は準備をよろしくお願いします。

同期会がヨコ糸とするならば、タテ糸としての職域ともいえる同窓会の組織化をお願いしたいと思います。同窓会名簿で悪事をはたらく不届き者が後をたたない時世なだけに会員情報を集め維持発展させることが難しくなっています。そのような中、企業・団体などの中での同窓生を取りまとめていただき、同窓会役員会幹事として活躍していただきたいと思います。幸いにも札幌には企業、組織団体の本社や拠点が集中しています。職域同窓会や地域同窓会を組織し支部活動への強力なバックアップをお願いしたいと思います。

同窓会活動を考えた場合、単に同期会の集合体ではもちろんなく、過去を懐かしむだけの会でもありません。今現役で活躍している方々、一線は退いたが元気ハツラツの方、幅広い人脈作り、情報交換の場、人生を学ぶ場として活用していただきたいと思います。そして同窓会員としての人間のつながりをより親密にしていただきたいと考えます。そのような考えから、今回はテーブルの着席も期ごとではなくランダムに座って頂く方式といたしました。先ずは知り合い、そこから何かが生まれる。そんな場にしたいと思っています。人と人の繋がりが益々分断される時代状況の中で、同じ学び舎に学んだという事実は動かしがたいものであり、同窓会の絶対的価値であると考えます。

さて、すでに始まっている人口減少社会、後に続く後輩たちの将来を展望するならば、ややもするとフェードアウトするのではないかと弱気にならざるを得ない同窓会であります。同窓会が対象にする顧客は誰だろうと考えた時、現役の在校生たちも将来の顧客、或はすでにお客様ではないでしょうか。同窓会として現役の在校生たちとの関わりを真剣に考える時であろうと思います。物心両面での支援を行うことにより、同窓会の存在価値を認識してもらい、将来の会員として活躍してもらえるようにしたいものです。

今議論されている学制改革、グローバル化する中で規制緩和の影響は教育の効率化にもやって来ないとも限りません。その時に同窓会の影響力はどれほどなのかわかりませんが、母校は同窓生にとってはかけがえの無い「心の故郷」であります。そんな問題意識のもと今後の同窓会運営はなされていかなければならないと思います。

難しいことはさておき、今年度の総会・懇親会は「今宵はどっぷり函中生」のテーマのもと楽しく交流したいと思います。会員の皆様の末永いお力添えをいただき「永久に不滅」の白楊ヶ丘同窓会札幌支部を発展させて参りましょう。

歴史の重み

白楊ヶ丘同窓会会長
石井直樹
（第六三期・昭和三十六年卒）

白楊ヶ丘同窓会札幌支部定期総会・懇親会のご盛会をお喜び申し上げます。昨年は、都合により出席できず申し訳ございません。出席しました菊地幹事長からその様子を聞いておりましたが、大変和やかな会合で出席者の皆様と楽しくお話ができたということで、その雰囲気の素晴らしさに感心しておりました。

さて、同窓会の重要課題の一つでありました函中百年記念会館（同窓会館）の処遇の件ですが、新聞広告やホームページを見て当日の現場説明会に十数名の方々が出席され、後日、入札の結果、最低予定価格での購入希望者があり、適正に手続きを終えたところであります。この一連の事務処理にあたっては、それぞれの職種に精通された同窓会の皆様のお手伝いをいただき順調に進み、心から感謝申し上げます。売却益につきましては、学校側とも相談しながら在校生や同窓会のために有効活用してまいりたいと考えております。

また、この四月の中部高校教職員の人事異動に伴い、全日制、定時制合同の歓迎会が開催され、多くの先生と懇談ができ、また、この歓迎会でのそれぞれの先生のスピーチから、考え方の一部を垣間見ることができ有意義なひと時でした。何よりも、教職員の皆さんの中に十数名の同窓生がおりましたことは驚きました。ある意味では、同窓会の活動にも弾みがつくものと心強く思っております。

この五月には、函館で、ペリー来航百六十周年の記念行事があり、ペリー生誕の地アメリカニューポートの市長が来函したところです。ご承知のとおり、日米和親条約により函館は海外にいち早く門戸を開いたため、異国情緒豊かな街並みが今なお色濃く残っており、歴史と文化を誇る街とも言われております。その歴史ですが、わが母校も、来年は創立百二十周年という大きな節目の年を迎えます。もちろん、学校側が中心となり式典さらには祝賀会を催すことになりますが、われわれ同窓会としてもそれぞれの立場から応援をさせていただき、当該周年行事を成功させたいと考えております。つきましては、札幌支部の皆様にも是非ともご支援をいただければ幸いです。

そして、百二十周年の翌年には、陸、海、空の交通の要衝である函館市にとっても歴史的な変化がある年です。新幹線の整備計画ができてから四十数年待ちに待った北海道新幹線が函館まで延伸されます。これにより、東京まで四時間十分で結ばれることとなり、東京からの交通機関の選択肢がより充実することになると同時に栃木や茨城などの北関東圏域などからのアクセスが非常に便利になり国際観光都市を標榜する函館にとってより観光客の層が期待されます。当然、毎年九月に函館で開催される白楊ヶ丘同窓会の総会あるいは個別の同期会などにも出席することも可能になるほか、東京支部や宮城支部からの出席者の利便性も高まるものと思われます。

ところで先般、日本創生会議の人口減少問題検討分科会の推計では、函館市の人口は二〇四〇年には十六万人台になるのではと予測され、雇用や医療、介護などの様々な取り組みが必要となってきます。高校を卒業し、東京や札幌などへ進学や就職をした場合、地元函館へ戻ってくるケースが少なく人口減が続いております。全国的により一層高齢化社会が進むと言われておりますが、退職やその他人生のひとつの転機に景観はもとより食生活や住環境に恵まれた函館での生活も選択肢の一つとして考えてみてはと思います。

同窓会札幌支部のますますのご発展と荒川支部長はじめ会員の皆様のご健勝、ご活躍を祈念申し上げ挨拶とさせていただきます。

東京支部だより

白楊ヶ丘同窓会東京支部長
安田　康次
（第六七期・昭和四十年卒）

白楊ヶ丘同窓会札幌支部の皆々様におかれましては、お変わりなく、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。昨年は札幌支部の方々には東京支部懇親会に出席いただき有難うございました。厚く御礼申し上げます。

札幌地方は数十年ぶりに五月に真夏日があったと聞いておりますが、暑さに辟易しているのではありませんか。ついこの間、札幌支部同窓会には出席したと思っておりましたが、あっという間に一年が過ぎ、また今年もご招待いただき有難うございます。

さて、東京支部の近況ですが、当支部は四月～翌年三月の一年間を会計年度としており、四月に評議員会を開催し、本年度の事業計画を承認いただき活動をしております。また、理事会を年数回開き諸問題の解決に当たっております。

やはり最大のイベントは懇親会の開催になりますが、その幹事を五十歳の期にお願いしており今年で十年になります。昨年は十月に「グランドアーク半蔵門」で八三期（昭和五十六年卒）の方が幹事期となって企画し、「旧交を温め、楽しい時間を‼」をテーマにマジックショウのイベントを加え本部・支部及び在京他校同窓会役員の方々のご臨席を賜り、百七十名の参加をいただき、楽しいなかに同窓生間の旧交を温めあう盛大な会を開くことが出来ました。今年度も同じ場所で十一月八日（土）十二時～十四時半で決まっております。八四期（昭和五十七年卒）の方が幹事になり、「函館つながり」をテーマに企画を準備しております。是非、ご都合がつきましたらご参加いただければ幸いです。

もうひとつは会報「東京白楊だより」の発行があります。昨年より担当理事の方々の努力が実り全ページカラー印刷での発行が叶い、写真などがはっきりして見やすくなったと自負しております。今年は出来ましたらページ数を二十ページに増やして、皆様からのお便りをお待ちしております。札幌支部の皆様からも同期会報告などをいただければと思っております。

その他にも毎年の行事として、ポプラ会ゴルフコンペがあり、昨年は七月（紫カントリークラブ）、十一月（浦和ゴルフクラブ）の二回開催されました。毎回少しずつではありますが、若手の皆さんの参加を得ております。東京は会員の皆さんの居住エリアが広く、会場設定に幹事が苦労しておりますが、これからも絶えることなく永く続けていこうと思っております。もう一つ函館巴会という東高、西高そして中部の三校ゴルフ団体対抗戦が年一回四月に行われており昨年は優勝できましたが、今年は残念ながら三位となってしまいました。

東京支部ではホームページを開設しておりますが、より充実させる為にホームページをタブレット端末（スマートフォン、ｉＰａｄなど）での閲覧を可能にするため、ソフトウェアを変更しました。又リアルタイムでの情報発信、会員相互のコミニュティー形成の場として活用を考え、Ｆａｃｅｂｏｏｋページを開設しました。

渉外活動も積極的に行っており、母校卒業式、本部、札幌、宮城、関西各支部および他校（東、西、商業、工業、ラサール校）同窓会に出席し、運営方法などを参考にさせていただいております。

昨年も東京支部の大きな課題として年会費納入者の長期減少を掲げて取り組んでおりますが、中々妙案も浮かばず悩んでおります。若い方の参加者が同窓会支部を盛り上げる最大の効果と思い、一人でも多く出席できるような会にしていきたいと思っております。

最後になりますが、白楊ヶ丘同窓会札幌支部の益々の発展と荒川支部長はじめ、役員の皆様、札幌支部会員の皆様のご健勝を祈念申し上げ、東京支部の近況とさせていただきます。

グローバル人材

北海道函館中部高等学校長
千原　治

白楊ヶ丘同窓会札幌支部の皆様には日頃より本校の振興と教育活動へのご支援を賜り、心より御礼申し上げます。函館中部高校に赴任して二年目となります。昨年は初めての函館勤務で、学校内外の見るもの聞くものすべてに驚きと感動を持って接することができました。厚みのある歴史の中で仕事ができることを光栄に思っております。

さて、今回は本校の新しい取組である「SGHアソシエイト」について、さらに本校の英語教育とその源とも言うべき函館の英語受容について書いてみたいと思います。

一　SGHアソシエイト

平成二十六年三月二十八日、本校は文部科学省からSGHアソシエイト校に選定されました。

今日わが国の抱える課題は多岐にわたっておりますが、その中でも教育改革は重要課題として位置付けられており、政府が設置した教育再生実行会議は各種の提言を矢継ぎ早に行いました。第三次提言「これからの大学教育の在り方について」が発表されたのが、昨年五月でした。その中で、「グローバル化に対応した教育環境づくり」として、大学における取り組みが述べられております。また、そのためには大学のみならず、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育を充実する」ことも重要であるとして、スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）構想が提起されております。

文部科学省はこれを受けて、今年一月十四日に「SGHに関する研究開発の実施希望について」を発表し、SGHの指定を希望する学校を広く募りました。その目的は「現代社会に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを養成する」というものです。応募の締め切りが二月十四日と、わずか一ヶ月しかない中で全国二百四十六校の高等学校・中等教育学校が名乗りをあげました。本校でも、SGH立案委員会が中心となって、研究開発構想名を「函館から世界を見渡す人づくり」、課題研究テーマを「グローバル化と国際都市函館の未来」として、基本構想から具体的な方策や到達目標等に至るまでの詳細な計画を完成させ、応募するに至りました。

この計画については一定の評価を得ることができ、第一次審査である書面審査をクリアし、第二次のヒアリング審査まで進むことができました。残念ながら、最終的には所謂SGH指定校の五十六校に入ることができず、最初に述べましたSGHアソシエイト校（全国で五十四校）となったわけです。SGHアソシエイト校については、文部科学省の文書には「SGH事業を踏まえたグローバル・リーダー育成に資する教育の開発・実践に取り組む高等学校」と説明されております。

本校としては、今回の計画書に盛り込んだ内容について、生徒の学力や教養の向上に資するという点で、効果的かつ確実性のある取組を精選してやっていこうと思っています。

二　函館と英語

SGHの研究開発構想名や課題研究テーマとして、「函館」ということを強調しました。それは、グローバル人材を育成するプログラムを策定するに際して、開港以来国際都市として発展してき函館という地域性を抜きにしたものは考えられなかったからです。

国際都市函館ということではたくさんの切り口がありますが、その中から、函館という地域と英語との関わりについて少しだけ歴史を振り返ってみたいと思います。

ペリー提督率いる黒船が我が国に来航したのは嘉永六年（一八五三）でした。翌年の二回目の来日の折には箱館に寄港しています。彼らは箱館で買い物をしたり動植物を収集したりしていますので、当時の箱館の人々は間違いなく英語を耳にしたでしょう。幕府は和親条約に基づいて安政二年（一八五五）に箱館を開港し、翌年には「諸術調所」を設けました。これは研究教育施設であり、蘭学者武田斐三郎を中心として蝦夷地開拓に必要な技術の開発と人材の育成を目指したのです。ここでは英語も使用しましたが、オランダ語が主流でした。しかし、米英露人の多い箱館で必要性が高かったのは英語でした。そこで、江戸から第一流の英学者名村五八郎を呼び、文久元年（一八六一）に「英語稽古所」を設け英語の通詞を養成したのです。さらに、慶応二年（一八六六）に堀達之助を中心に「箱館洋学所」を開校しています。このように、幕末期の函館では当時の我が国における最先端の英語教育が施されたのです。

ちなみに、堀達之助は長崎オランダ通詞の家の出身で、ペリーが最初に来たときに旗艦サスケハナ号で通訳の任に当たった人物です。この頃の日本人で英語を自由に操れる人はいなくて、オランダ語を介して交渉が行なわれたようです。堀達之助はその後英語を懸命に勉強し、英和辞書を編纂しています。また、一緒に乗り込んで交渉に当たったのが、当時浦賀奉行所与力であった中島三郎助（函館の人にはおなじみの方ですね）でした。さらに、箱館洋学所での堀達之助は、教材として非常にたくさんの英語の書物を購入しました。それらが「函館文庫」として整理され、さまざまな変遷を経て、現在は本校図書室と函館市中央図書館に所蔵されています。

三　本校の英語教育

グローバル人材として求められるものが、単に英語力を身につけることだけではないことは当然です。深い教養を身につけることであり、自分の生まれた地域や我が国のことについて自分の言葉で語れることであり、異文化を理解することです。その際に必要なスキルが英語によるコミュニケーション能力なのです。

本校は平成十五年に文部科学省の「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（ＳＥＬＨｉ）」の指定を受けて以来、ＳＥＬＨｉの六年間を始めとして、毎年文部科学省或いは道教委による英語の研究指定校となり、授業や指導方法等の改善に努めてきました。

高等学校の新しい学習指導要領は昨年度から本格実施となりました。これまでと大きく変わったことの一つに「オールイングリッシュによる英語の授業」ということが話題になったことはご存知のことと思います。本校ではこれまでの経験を生かして、何の違和感もなく新しい学習指導要領に沿った授業を行っています。つまり、完璧なオールイングリッシュでの授業です。生徒は先生の英語での説明に耳を傾け、自らも英語で話すことを楽しんでいるかのようです。教室内の空気が英語なのです。学校によっては、オールイングリッシュがなかなか進まなくて苦心しているようですが、本校ではすべての英語科教員がごく普通にそのような授業を行っています。これらの取り組みは間違いなく道内最先端をいっているものと自負いたしております。これまでの本校の研究や実践の成果が英語科のものとして共有できているからこそであろうと私は思っています。

このような教育環境の中で、本校生徒が将来のグローバル社会の中で力強く生きていくための基礎になるものを身につけて欲しいと願っている次第です。

四　結びに

来年度は創立百二十周年記念の年です。平成二十七年十月十七日（土）に記念式典並びに祝賀会を行なう予定です。白楊ヶ丘同窓会札幌支部の皆様の多大なるご支援とご協力をお願い申し上げまして、この文を閉じたいと存じます。

回想

校歌「宇賀の浦」に想う

熊谷英昭
（第五四期・昭和二十七年卒）

はじめに

昭和二十五年四月一日、市内公立普通科高等学校の統廃合が行われ、我々函中五四期生は、北海道函館中部高等学校二年生としてスタートしました。当時の様々な学校生活の想いでは、今となっては六十四年前の事を正確に思い出し記載できる自信はないので、若し誤記があったらお許し下さるよう最初に願う次第です。

昨年の白楊ヶ丘札幌第二十九号に、現函館中部高等学校長　千原治氏が「校歌」について詳細に述べられて居られ、私も記憶を新たにしているところです。新校歌の作詞・作曲は、ご承知の様に本校の藤原直樹先生と酒井武雄先生であります。私ども在学時にお世話になった先生方ですが、白楊会員名簿（平成十一年版）の旧職員欄（二十三頁）に、藤原先生の在職期間が昭和二十三年六月迄と記載されていて、我々は昭和二十五年・二十六年に授業を受けていた訳ですから、名簿の記載が違っているのではと、思わぬ発見をした次第です。

部活　合唱部に入って

統合以前の学校でも合唱部に所属していたので、躊躇なく合唱部に入りました。今迄は男子校でしたが、新たに女子が加わり、混声合唱団が生まれたわけです。音楽担当の酒井先生から、君たちが他の生徒に先んじて、本校校歌を最初に歌うことになるのだと言われ、何かしら優越感や名誉・誇りを感じたものです。特に校歌の最後の部分が男女の二つのパートに分かれた混声合唱になるところに充実感があり素敵に感じました。そのため、同窓会等で校歌を歌うとき、初めて校歌を教わった時の事や鉄柱のそそり立つ古い音楽室が脳裏に浮かんできて、背筋がすきっと伸び若い頃の自分になった様な気持ちになります。私と同期で合唱部に在籍していて、この札幌の同窓会に常連として、澤口悟郎氏や木村迪彦氏も参加されていることは懐かしく頼もしいです。

宇賀の浦（大森浜海岸から見る漁火）

NHK合唱コンクールに参加して

開校初年度から標記のコンクールに出場し、函館地区で優勝することに専念しました。酒井先生のデリケートで熱心なご指導振りは、皆神経を集中し指揮棒を注視しました。初めは緊張のあまり音質が硬く、滑らかで伸びやかになりにくかったが、やがて心地よいハーモニーが響く様になっていきました。コンクールには定員があって、男子がほとんどが三年生で二年生から小生のみが選ばれたので、そのことは未だにはっきりと覚えています。練習

の甲斐あってか、本校が優勝し、輝かしいスタートを切りました。翌年も連続して優勝しましたが、全道大会では続けて三位に甘んじたことは口惜しかったです。当時は全道大会へは生徒が行くのではなく、函館放送局で課題曲と自由曲を録音したディスクが送られ、札幌で審査員の先生方が録音盤の音を聴いて成績を決めていました。酒井先生が、放送局の録音技術を随分と気にされていたことを覚えています。三年生の時は小樽に出向き、ピアノ伴奏なしで演奏をしました。出だしの音は控えで待っている時に音叉で各パートの音を記憶していて、指揮棒の動きとともにそれらの音が滑らかに奏でられ聴衆を驚かせました。また、酒井先生がハッスルし過ぎて、指揮棒を飛ばしてしまったことも今となっては懐かしい思い出ですが、演出に工夫されておられたようです。また、別の例としては、合唱練習に元町の教会へ連れていってもらい、オルガンの伴奏で声を合わせた時の感激は忘れられません。独特の雰囲気の中で、生のとけあった声の美しさを体感させて頂きました。私たちの卒業後も後輩が頑張って全道で準優勝している報に嬉しく思っています。

元町地区教会風景

中学校の統合に関わって

話ががらっと変わって、平成四年、歴史と伝統を誇る函館市立旭中学校と函館市立新川中学校が最後の年を迎えていました。旭中学校は生徒数の減少・校舎の老朽化によって、翌年同じく生徒数の減少している新川中学校と統合合併し、新しい中学校になろうとしていました。私事で恐縮ですが、その時、私が旭中学校の校長を仰せつかっておりました。翌年の統合による新設校の準備に大わらわでした。その中の一つに新設校の名称をどうするのか、原案を教育委員会に答申しなければなりませんでした。旭と新川から、先生・父母・同窓会・地域代表等から代表が集まって、何回か会合を持ち、幾つかの原案を生み出し、教育委員会で「宇賀の浦中学校」と定めました。もうお気付きと思いますが、我が白楊ヶ丘同窓会の母校である函館中学校校歌及び函館中部高等学校校歌の歌詞に「宇賀の浦」がうたわれております。函館中学校校歌の歌詞は、土井晩翠氏によるものですが、歌詞の三番の一行目に「宇賀の浦万頃の水」とあり、函館中部高等学校校歌の歌詞は藤原直樹氏によるもので、一番の三行目に「宇賀の浦風の砂山」とあります。「宇賀の浦」というのは不確かな記憶によると、湯の川の根崎付近の海岸から、函館山の住吉側の海岸付近迄のことと、初代宇賀の浦中学校校長になった時に何かで読んだ覚えがあります。ここからは推測の域を脱しませんが、話は前に戻って、新設校名称検討委員の中に白楊ヶ丘同窓会員が何名かいて、函中や中部の校歌が頭に刷り込まれていて、原案に強く反映したのではないかと思っております。

この同窓会で、新・旧校歌を歌うとき、各自胸の中に色々な思いを浮かべながら歌っておられることでしょうが、私としてはそれに加えて「宇賀の浦」という文字が新設校の成り立ちや苦労等の色々な思い出とともに頭をよぎっていく奥深いものがあります。ちなみに、函館に行かれ、宇賀の浦中学校を眺めてみたい方は、大森町の旧新川中学校が改装されたもので、慰霊堂の向かいに海を背に建っており、玄関前に校名が角柱に記され、目に留まると思います。

回想

中部高校の思い出と同窓会のことなど

綱森史泰
（第一〇〇期・平成十年卒）

標記のことについてエッセイ風の文章をということでお願いをされましたが、説明調の文章しか書くことができずご容赦下さい。

中部高校時代のことを思い出しますと、一番に思い出されるのは恩師である先生方と友人とのことです。一年生時の担任の南俊明先生（数学担当）には、授業はもちろんのこと（ただし、南先生にご指導を頂いたにもかかわらず、数学は苦手科目でした）、大学への進学に関しても貴重なアドバイスを頂いたほか、私が所属していた吹奏楽局でも顧問としてご指導を頂きました。私が一年生のときにちょうど中部高校設立百周年の記念式典があったのですが、その際には私が曲をつけた記念歌を、南先生が吹奏楽による伴奏付きの楽曲に見事にアレンジされて、南先生の指揮の下、吹奏楽局の演奏による伴奏でクラスの学生が歌唱したのが思い出に残っております。その後、南先生は、吹奏楽の甲子園ともいえる全日本吹奏楽コンクールで使用される課題曲を作曲されるなど吹奏楽の分野で大活躍されていると聞き及んでおり、私の方はたった一年で吹奏楽局を辞めてしまいましたが、指導を受けた先生の活躍を大変嬉しく思っております。

二年生時の担任の宮下敏夫先生（古文担当）は、当時、新進気鋭の若手の先生であり、大学では哲学を専攻されていたこともあって、授業の内外でさまざまな哲学・思想や書籍を紹介してくださりました。私は毎日のように休み時間も職員室の宮下先生のところに話を伺いに行っており、今になって思えば授業準備等でお忙しい先生にとって大変迷惑な学生であったものと思いますが、私の方は先生のお話から大きな知的刺激を受けることができました。私は、大学の法学部に進学しましたが、宮下先生からの影響を大きく受けて、教養科目では哲学・思想の講義を好んで受講し、今でもそのような分野の書籍を購読するなどしています。

その他には、担任ではありませんでしたが、坂元紳一先生には現代文の授業を頂いたほか、先生から声を掛けていただき、先生が顧問をされている演劇部の劇で使用する劇中歌の作曲をしたこともありました。その他にも在学中にはこちらに記載し尽くすことができないほど、たくさんの先生方に多くのご指導を頂きました。

友人との思い出に関しては、やはり毎年行われる学校祭のことが一番のイベン

函館中部高等学校（写真提供：104期片山幹雄さん／ P8.11）

函館山からの夜景

トとして思い出されます。一年時には初めての学校祭で放課後遅くまで仮装パレードやクラスで発表するダンスの準備・練習をしたことが、二年時にはクラスの模擬店の準備のために皆でさまざまな食材や機材を調達したことと、窓を閉め切って大変暑い教室内で音楽バンドによるライブを実施したことが印象に残っています。三年時には、ちょうど私が骨折をして入院をしていた時に学校祭があり、病院の玄関前で車いすに乗りながら仮装パレードを見送ることとなりましたが、このこともよく記憶に残っています。また、個別の友人のことでいいますと、五稜中学校時代からの同級生であり友人であるK君とは、中部高校に入ってからも良きライバルとして勉強のことで切磋琢磨し、途中で私が文系、彼が理系に別れましたが、互いに向上し合うことができました。K君とは一年時はクラスも一緒だったのですが、同じクラスには別の中学校出身の飛び抜けて成績優秀なM君もおり、M君の存在もまた大きな刺激となりました。K君、M君は今もそれぞれの専門とする分野で活躍しており、尊敬すべき友人です。二年生のときに同じクラスになったS君は、美術部に所属しており、授業中にも絵を描いているなど不思議な人だなと思っていたのですが、ひょんなことから話をしたところ意気投合し、以来、高校時代は放課後にS君と遊ぶ（テレビゲームがほとんどでしたが）ことが多くなりました。彼も、現在は自分の得意とするアニメーション制作の分野で活躍しています。また、同じクラスになったことはないのですが、隣のクラスにいたU君も、飄々としながらユーモアに満ちた人物であり、体育の授業中や行事のときに話をすると気が合ったため友人となり、高校卒業後も続く交友関係になりました。彼は、現在は道内のテレビのニュース番組の記者として頻繁にテレビにも映っており、数年前には全国放送のニュース番組で首相に質問をする姿もテレビでみられました。そのほかにも、同級生、吹奏楽局で一緒だった友人など、多くの友人と出会うことができ、今でも仲良くして頻繁に会っている友人もいますし、最近は「フェイスブック」を利用してインターネット上で多くの同期生がつながっています。このような中部時代の交友関係は、私にとってとても大切なものとなっております。

さて、最後に同窓会のことについてですが、私は何年か前から白楊ヶ丘同窓会札幌支部の定期総会・懇親会に出席させていただいておりますが、このような同窓会に参加することがない限り知り合うことのできなかったであろう諸先輩方と出会い、年に一度、中部高校時代のことを思い出しながら懇親できる機会は、大変貴重なものだと思います。しかし、誠に残念ながらこれまでのところ、私よりも下の期の同窓生の参加は少数にとどまっています。私の方でも札幌に在住している同窓生には上記の「フェイスブック」などを通じて同窓会の存在は知らせておりますが、なかなか若手の同窓生の参加が増えないのが現状かと思います。今回、このように支部報に原稿を掲載していただく機会を得ましたので、この支部報を同窓生の方々にお届けするなどの方法によって、同窓会への同窓生の参加が増えるように私の方でも微力を尽くしたいと思います。最後に、白楊ヶ丘同窓会札幌支部の益々の発展を祈念いたします。

回想

函館時代を振り返る

飯田祐司
（第七九期・昭和五十二年卒）

最近は本当に時間の経つのが速く感じる。日々の喧騒にあくせくしているうちに大切だった高校時代の思い出も少しずつ溶ける様に忘れていっているようだ。

両親は今も健在で函館に住んでいる。年に一度帰省時には、恒例行事の様に父母を車に乗せて市内を巡り、家族で思い出話に花を咲かせる。幼少時に住んでいた場所、幼馴染の家、お使いに行った店。八十代の母も昔のことをまるで昨日のことのように嬉々として話しだす。母の昔話をBGMに車の窓を開けると、今住む札幌では感じる事のない懐かしい潮の香りが微かに鼻をくすぐり、「ああ、かえってきたな」と、何とも言えない気持ちになる。

車だと、あっという間に通学路を抜ける。そりゃそうだ。当時は学校へは自転車で通っていた。毎日どんなことを考えながらペダルを踏んでいたのだろうか。多分、今なら簡単に出せる答えさえ悩みの迷路に捕まりながら、なかなか辿り着けずにいたのだと思う。そんな迷宮の片鱗を、時として不機嫌な時の息子の横顔に見つける。いつのまにか息子もあの時の自分の年齢を超えている。

現在の校舎にたどり着く。が、校舎に当時の面影は全く無い。ただ広いグラウンドだけは校舎の裏側で昔の様にそこにある。そういえば卒業アルバムの写真を見ても、校内よりグラウンドや屋外での開放的な写真が多いことに気付く。当時の我が校の校風を象徴しているようにも思える。そういえば、美術の時間に五稜郭へスケッチに出かけ、授業時間が終わっても学校に戻らず、そのままクラスメイトと堀でボートを漕いで遊んで帰ったことがあった。全くあれでは当時の先生たちも大変だったろうなぁと、もはや遅すぎる反省を今になってしている。

もう一つ五稜郭公園の淡い思い出がある。

当時のクラスメイトの男子数名と五稜郭で遊んでいた時のこと。ラッキーな事に（？）やはり数名の女子群に出くわした。聞けば遺愛女子の生徒だという。何となく意気投合し、そのあとも何度かグループで一緒に遊びに行ったりした。その中でもひときわ美形の女子がいて、皆、秘かに憧れていたのだが、気が付けば何となくそのグループとの付き合いも自然消滅してしまっていた。ところがそれから二・三年して友人から連絡があり、

「おい、知ってるか？あいつ、デビューしたってよ！」

しばらくして歌番組で見た皆の憧れのあの子は、さらに綺麗になってブラウン管の中で笑っていた。函館男児達の届かぬ思いのせつなき溜息で、その夜は春でもないのに五稜郭もうっすら桜色に染まっていたかもしれない。

五稜郭公園

白楊ヶ丘同窓会の札幌支部に入ったため、会報に名前が載り、卒業以来会えていなかった同級生から連絡のメールをもらった。その人を通じてすでに亡くなってしまった恩師や級友の話を聞くことができた。故郷を離れて随分と時間が経ち、地元に住んでいる同級生達に会える機会も殆んど無い中、高校生だったあの日の自分には想像もできなかったコミュニケーションツール「メール」という方法でその情報は私のもとに届く。時代の移り変わりを実感することしきりである。

私が高校生だった当時は貸レコード屋さえ無かった時代だが、今は石川町にT

金森倉庫群

SUTAYA函館店が出来て最大のコミュニティになっているとのことだ。高三になる娘に言わせれば、そこは金森倉庫や美観地区、それに函太郎と同じくらい函館に行ったら寄りたいポイントの一つなのだそうだ。そういえば同級生に「函館市内に住んでいながら、TSUTAYAで数十年ぶりにクラスメイトに会った」という話も聞いた。皆、好むと好まざるにかかわらず容姿風貌も変わっているのだろう。かくいう私も当時と比べて体重が三十キロも増量している。

昭和五十八年に新入行員として北洋銀行の函館支店に配属となり、二度目の函館を約五年間過ごした。社会人として生活した函館は高校生時代の函館とは全く違ったものに感じられた。函館市内の経済圏の中心は当時まだ駅前にあり、老舗の地元資本がまだ頑張っていた。

森文化堂、ムライ運動具店、畠山靴店、赤帽子屋、大門タクシー等々。中には高校時代にお世話になっていた店が、社会人修行中の新入行員時代にお客様となって接する機会があったケースもある。振り返ると、高校時代といい新人行員時代といい、私を成長させてくれる場所として、いつも函館はそこに在った。

現在、函館中部高校に通学している生徒たちは、どんな事を考えながら自転車のペダルを踏んでいるのだろうか。高校生のあの頃、悩んでいた時間が現在の自分を作っているのだとしたら…。五十五歳のオッサンは、今母校に通う顔も知らない後輩たちに思わず力一杯のエールを送りたくなるのだが、青春まっただ中の彼らにとっては、多分確実に「うざい」に違いない。

今回の同窓会の原稿依頼の件を通して、改めて当時を振り返るよい機会をいただき、母校や故郷に思いをはせることができた。また、同窓会を通じて各世代の先輩・後輩皆さんにお会いする機会にも恵まれ、思わぬところで繋がっている不思議なご縁を知ることができた喜びは何物にも代えがたいものである。

白楊ヶ丘同窓生の御縁御恩に恥じぬよう、日々研鑽を…と襟を正す心持である。

旅の思い出

親日ウズベキスタン

田辺文彦
（第六八期・昭和四十一年卒）

反日教育を行っている周りの国とは違い、日本人と分かっただけで尊敬され、信頼される国が中央アジアにある。それはウズベキスタン共和国である。戦後シベリアに抑留された日本人がウズベキスタンに二万五千人も送られ、そこで道路、運河、ダム、劇場などのインフラ構築整備に従事させられた。これらは今もしっかり使われている。中でも一九六六年四月二十六日、ウズベキスタンの首都タシケントは直下型地震に直撃され七万八千戸もの日干しレンガ造りの家屋が崩壊し三十万人以上が家屋を失った。しかし日本人抑留者が建設した劇場（ナヴォイ・オペラ・バレエ劇場）だけはビクともせず、現状を保っていたそうです。

ウズベキスタンでは、「日本人の建物は堅固だ」「日本人の建築技術は高い」という評価が定着した。今回の訪問で、公園でも、道路脇でも我々が日本人とわかると、子供たちが笑顔で手を振ってくれる。博物館では若い娘さんグループにしばしば声を掛けられた。

子供の時からの教育がいかに大切な事なのかを知らされた。

ナヴォイ劇場

中央アジアはユーラシア中央部の乾燥地帯にあるため、降水量も少なくそのほとんどが草原と砂漠に覆われている。しかしその周囲には世界の屋根と言われるパミール高原、天山山脈があり、その豊富な雪解け水が西に向かって大きな大河（アムダ

リア川）となり砂漠を流れ、それは大きな湖アラル海に注ぐ。

地政学的にはパミール高原から下り、この大河がアフガニスタンの北部を通りこの国の南側を流れカスピ海と並ぶアラル海に流れ込んでいる。今ではこのアラル海が灌漑用水を多用するためか広さが以前の三分の一以下の大きさになり、取水も制限されているようだ。

この流れは当然大きな平原と数多くのオアシス都市や、サライ（ラクダ隊商の宿）を作り、多数のラクダを引き連れた隊商がこの道を通り貿易、通商をずっと以前から行われていたことは想像に難くない。さらにこの水を利用して人々は砂漠を緑豊かな都市に作り変え生活を営んできた。

地理的には周囲に国境線を画して東にキルギス、タジキスタン、南にアフガニスタン、西にトルクメニスタン、北にカザフスタンと接しており旧ソビエト連邦であった。歴史的にはトルコ、ペルシャ、中国の唐、モンゴルの元などの支配下に置かれたり、又これらを支配下に置いていたこともあった。

東西の交通路いわゆるシルクロードの中枢に位置するためにこの行路の安定は莫大な富をもたらし、争い合うことも多かった。

ウズベキスタンは直線距離にして約七千キロ、成田空港からは約九時間の飛行である。気候は大陸的気候で夏暑く、冬は寒い。

タシケント

タシケントはウズベキスタンの首都で人口が二百五十万人を超える大都会で、地下鉄も走る近代都市である。町の由来はタシケント（石の町）と十一世紀から呼ばれ、シルクロードの中継地点として栄えた。モンゴル軍に破壊された後、チィムール帝国、シャイバニ朝時代になって町は復興した。しかしその後の帝政ロシアによる支配が一八六五年から始まると様相が一変し、ロシア人の入植が続き、ソビエト連邦崩壊後の一九九一年ウズベキスタン共和国となる。ロシア人が多く、少し官僚的でソビエト連邦の匂いが残っているが、やはり日本人には親密感を感じることが多い。

タシケントのウズベキスタンホテル

ヒヴァ

ヒヴァの街は、野外博物館になっていて、ユネスコの世界遺産にも登録されているほど歴史学的価値が高い場所である。首都のタシケントから西に七百五十キロ、最寄りのウルゲンチから南西に三十五キロのアムダリア川の下流のオアシスの街で、古代ペルシャ時代からトルクメニスタンのカラクム砂漠への出入り口として栄えた町で、起源はおよそ四、五千年前までさかのぼる。中央アジアにはスタンの語尾を持つ国が多い。これはペルシャ語のイスタン（場所、土地、国）からきている。

ヒヴァは外敵を防ぐため外壁と内壁の二重の城壁で守られていた。内側の城壁に囲まれた内城イチャンカラには二十のモスク、二十のメセドレ（神学校）、六基のミナレット（尖塔）をはじめとする数多くの遺跡が残されており一九六九年に「博物館都市」に指定された。

宿の多くがこの城壁内にあり、朝日や夕日の散歩では日中とは違う陰と色に染まる建物が幻想的。

ヒヴァの城壁内の土産物売り

ヒヴァ城壁内

ヒヴァの旧市街

ブハラ

ウズベキスタンの南東部に位置する町でサンスクリット語で「僧院」を意味する。ブハラは人口が二百三十七万人の比較的大きな町で九世紀から百年余りの間サーマーン朝の首都だったところである。新市街と旧市街とに分かれており、リャビハウズと呼ばれる池（四十六×三十六メートル）付近が旧市街の中心でホテルも多く賑わっている。

近くにバザールがあり、観光中の買い物客でここも賑わっている。二年間は食べられるパンやディル、コリアンダー、サフラン、パセリなど実に多様な香草類、干しぶどう、などのこれ又多数のドライフルーツ類、さらにナッツやドライフルーツを混ぜ込んだ砂糖菓子などスィーツ類が並ぶ。ガイドの話ではバザールにはハマーム、サライ、モスクの三つが揃わなければバザールとは言わないそうだ。ハマームは公衆浴場のこと。ホテル、土産物店、商店街、市場が揃っていて都会的である。粘度の丸屋根がたこ焼き器状に並んでいるのが特徴であるバザール

（タキ・テルパクフルシャン）にはさらに、絨毯、帽子、あの鶴のクチバシの形をしたハサミ（これはウズベキスタンの特産品）を目の前で作る鍛冶屋、綿の特産品などをみて歩いて見飽きない。三つあるタキがすべて観光客相手の土産物店になっている。近くには歴史的な建造物のメドレセが三つ、ブハラで一番高い四十六メートルのカラーン・ミナレットがある。これはブハラのシンボルで、八百年以上も町の上にそびえている。

カラーン・ミナレット

サマルカンド

チムール朝の首都であったサマルカンドはペルシャ風のモスクやメドレセが数多く残り、チムールの墓（グリ・アミール）もある。チムール朝は現在のイラン、イラク、アフガニスタン、中央アジアを支配した王朝であった。街全体が青い色が多くみられ、別名「サマルカンドブルー」と呼ばれている。

シャーヒズィンダ廟群
（サマルカンド有数の聖地）

市の中心部にあるのはレギスタン広場。「レギスタン」とは「砂地」を意味する言葉でこの広場には三つのメドレセがあり、広場を囲っている。ここでは軍隊の閲兵、バザールの開催、時には死刑執行の場ともなった広場である。

十五から十七世紀に建てられたメドレセであるが今はすべてが観光客相手の土産物店になっている。やや郊外にウルーク・ベグの天文台跡がある。ウルーク・ベグはチムール朝第四代君主（一四四七～一四四九年）だったが、学芸を手厚く保護し、天文学、数学、歴史、文学の関心を持っていた。この天文台から観察された記録が「ウルーク・ベク天文表」として著され、広くヨーロッパでも研究されることになった。

サマルカンドのパンは世界一といわれ、ガイドの案内でホテル近くのパン工房へ見学。できたてのパンを食べてみたが、できたては何処で食べても美味しいもの。

一般的な食事
揚げパン、ビーツ、パン、トマトと胡瓜

消えた民ソクド人

短い期間ではあったがアジアと西洋の中間地域、中央アジアを旅行してみて何となく親しみを感じた。イラン系の農耕民族ソクド人は商売がうまく、シルクロードの実質的覇者だった時期、多分紀元五世紀以降。しかしこの地域のアラブ化の中でちりぢりになった。逃げたり征服民族に同化したりで、言葉を失い、民族としては歴史に消えたが、中国ではソクド人を含めて西方の異民族を「胡人」と呼び、特にソクド人を「胡商」と言ったらしい。ソクド人の中国名は「胡」とか「安」、「石」という名前で残っているらしい。我が国には胡椒、胡瓜、胡桃、胡弓などの名前が残っているが、中国共産党主席の胡錦濤さんなんかも西の民族の末裔かも知れない。

平成25年度収支計算書

白楊ヶ丘同窓会札幌支部

自　平成25年4月 1日
至　平成26年3月31日

収入の部		
科目	金額	摘要
前年度繰越金	1,816,011	
年会費	326,000	@2,000円／160名　現金払　@2,000円／3名
終身会費	100,000	@10,000円／5名　@15,000円／2名　@20,000／1名
総会懇親会費	288,000	@5,000円／51名 @3,000円／6名　現金払　@5,000円／3名
広告掲載料		
雑収入	50,000	総会祝儀・寄付金等
預金利息	206	郵便貯金
上期収入合計	764,206	
収入合計	2,580,217	

支出の部		
科目	金額	摘要
総会懇親会費	260,000	会場関係費
講演会費	50,000	
印刷費	207,797	白楊ヶ丘札幌、総会通知、年会費払込票等印刷費
会員名簿作成費		
通信費	172,495	総会通知、支部報、発送費等
旅費交通費	89,020	本部・他支部総会参加旅費、その他交通費
会議費	42,500	役員・幹事会費
事務費	30,339	文具・消耗品費
振替手数料	19,920	郵便振替手数料
雑費	53,746	本部・他支部祝儀・その他雑支出
上期支出合計	925,817	
下期繰越金	1,654,400	内訳財産目録のとおり
支出合計	2,580,217	

財産目録		
種類	金額	摘要
現金	2,550	
振替口座	0	
郵便貯金	1,651,850	
合計	1,654,400	

白楊ヶ丘同窓会札幌支部　第34回定期総会・懇親会

講演会　「函　館　人」

講師　**中村　嘉人** 氏（第49・50期）

●講師のご紹介

1929年、函館生まれ。大阪大学経済学部卒業。教師、雑誌編集者、会社経営者を経て文筆業に入る。道銀文化財団副理事長、堀江オルゴール博物館常務理事ほか。

札幌市民芸術祭実行委員会委員。

著書に『ロマノフ家のオルゴール』『古い日々』（以上未来社）

『池波正太郎。男の世界』『経営は人づくりにあり』『大衆の心に生きた昭和の画家たち』（以上ＰＨＰ研究所）

『定年後とこれからの時代』（長谷川慶太郎氏との共著、青春出版社）

『時代小説百番勝負』（筑摩書房）

函館中部高等学校校歌

作詞　函館中部高等学校教諭　藤原直樹

作曲　函館中部高等学校教諭　酒井武雄

一、火柱のはためく峰も
年古りて緑の臥牛
宇賀の浦風の砂山
波よせてくずれ流るる
見よや物なべてうつろふ
窮みなし流転の相

二、北の国雪深けれど
その底には草は芽ぐめり
野山荒れ鳥潜めども
やがて来ん春の光に
万象の蘇る見よ
ここにあり不滅の生命

三、白楊のさやめく丘辺
秋深き梢仰げば
冴え渡る銀河の彼方
幽けくぞ星雲燃ゆる
胸に満つ久遠の思ひ
遙かなり真理の彼岸

四、限りなき流転の中に
生命あり不壊の学び舎
聞けや今窓の外遠く
新潮の入りくるひびき
よしさらば若人われら
踏まんかな希望の門途

函館中学校校歌（同窓会歌）

作詞　第二高等学校教授　土井晩翠

作曲　東京音楽学校教授　岡野貞一

一、玄冥の北の一道
関門の岸に臨みて
青春の薫にしるく
基おく育英の場

二、集い寄る千余の子弟
人生の花の綻び
身を鍛へ心を練りて
向上の一路を辿る

三、宇賀の浦万頃の水
駒が岳千仞の山
微を積みて高きに至り
滴より空をもひたす

四、形ある無言の教
仰げ我が紅顔の子等
業成らば双の方の上
興国の運も負へかし

五、母校の名子弟の誉
花と香と常に伴ふ
任重く道の遠きを
嗚呼健児勉めざらめや

編集後記

この時期になりますと、支部報編集の重い責任とともに函館中部高校を想う日々が続きます。この一年間、中部高校の複数の先生とかかわる機会があり、中部高校の現況を知ることができました。我が一〇四期は、札幌組の数名で月一回の定例会を引き続き開催できており、同期で三十歳を迎えたこと祝っております。私毎では、先日、富士山の登山に挑戦しました。天候と雪のため七合目までしたが、登山を教えてくれた恩師・中森司先生を思い出しながらの一歩となりました。

四月の幹事会にて、同窓会札幌支部の一層の繁栄のために、東京支部に倣い、「Ｆａｃｅｂｏｏｋ」ページの開設を準備しております。ウェブ上を通じて若い方々への情報発信をしてまいりたいと思います。

（一〇四期・中村大輔）